

「現代における古典の価値」

古典とは何か、価値とは何か

木田 章義（司会）

京都大学大学院文学研究科 教授

「現代における古典の価値」ということを考える時には、「古典」とは何か、「価値」とはどういうものかということを考えなくてはならない。

「古典」の定義は、この「古典学の再構築」の中でもかなり変わってきた。この特定領域が立ち上がった頃には、「規範となるもの」「知識の集積したもの」という定義が中心になっており、その観点から見れば、日本独自の古典は皆無になってしまう。

その後、①規範性のあるもの、②再生性（参照性）のあるもの、③表現・美意識、民族の感性を涵養するもの、という定義に拡大され、③の表現・美意識・民族の感性を涵養するものという定義が認められることによって、ようやく日本にも古典が存在することになった。

さらに定義を考えてみると

- (A) 民族・文化の伝統的思考や意識が記録されたもの
 - (B) ある時代に作られた哲学思想の中で、多くの人々に受け入れられる規範となったもの
- の二種に分かれるのであろう。

「価値」となると、

- (A) 実生活を規定するもの

これはほぼ無自覚的なもので、日本では神社や神木などが、無意識のうちに尊まれ、寺は跡形もなく無くなってしまふことがあっても、神社は必要な時には移

転させられることがあるが、何らかの形で神社の跡が残される。現代でも道路を延長、拡張する際に、大きな神木があった場合には、切ってしまうことは少なく、道の方を変えてしまふか、違ったところに植え替えるという作業をする。これなどは、無意識のうちではあるが、古事記・日本書紀の神話の世界が現代にも生きているということになる。

(B) 個人の、あるいは一つの社会の需要に応じて価値が異なる。この場合には古典そのものに固定した価値があるのではなく、個人の中で古典をどのように位置づけているかということが、その価値を決定するということになる。

(B-1): 現代の人々が短歌・俳句などを詠み、個人の表現の依り所となる場合や、能狂言・歌舞伎の鑑賞のように、精神的な豊かさにつながる場合、茶道のような礼儀作法の「規範」となる場合など、その価値は異なっている。

(B-2): (B-1) のような個人の範囲に止まらず、古典が現在の状況を見直すためのよすがとなって、それが一定の人々に支持され、現代を改革する思想へとつながって行くという場合もある。日本では近世の国学などがそれに当たる。日本の場合には、それが極端に進行してゆき、やがて日本は神国であるという、おそらく歴史時代始まって依頼の奇妙な迷妄の中に迷い込んでしまったことがある。

「価値」ということを考える時には、「役に立つ、役に立たない」という発想がその基準になることが多いが、古典に関しては、「役に立つ」から価値がある、役に「立たないから」価値がないということは言えないだろう。古典に関しては「役に立つ、役に立たない」という基準をあてはめて、その価値を云々するのは意味がないだろう。

(B02「伝承と受容(日本)」班)

不可視なものを見るために

中畑 正志

京都大学大学院文学研究科 助教授

このテーマをまともに論じるならば、「現代」と「古典」の意味内容がある程度まで規定しておく必要がある。「現代における古典の価値」をどのように、どれだけのものとして見積もるのかは、「現代」及び「古典」というタームの理解の仕方にほとんど依存するからである。しかし、この限られたスペースでそのような大きな問題を論じることは断念せざるをえない。ここでは、古典とは歴史的伝承のなかで何らかの仕方価値が認められてきた作品として漠然と規定した上で、私がかかわっている西洋古代哲学の分野でのそのような著作について、その「現代的価値」を考えるために基本的に踏まえるべき事情を確認したいと思う。

他の分野では事情は異なると思うが、少なくとも哲学に関するかぎり、作品が歴史的に古いということ、あるいは歴史的に尊重されてきたということそれ自体は、最終的には、その価値を保証するものではない。たとえば美的センスにとっては、作品の経た時間的経過それ自体に意味があるという見方もあるだろうが、それとは事情が異なるのである。なぜなら、哲学における著作の価値とは、それが提示する見解やものの見方の理論的な優位（そこには理論の深さ、整合性、包括性などがふくまれるだろう）によって決定されるのであり、その時間的来歴と理論的な正当化とは相互に独立だからである。かりに現在の諸見解とは異なる知見が古典に見いだされたとしても、そのことは、よりすぐれた見解に取ってかわられたあとの遺物を確認したにすぎないかもしれない。逆に、現代の特定の見解が古典にまで遡ることができたとしても、歴史的な連続性は、その見解の誤りの根深さを示す証左と考えられるかもしれない。実際、哲学では「プラトン以来の～」という形容は多くの場合に非難の符丁である。したがって、以上の意味では、少なくとも哲学においては、古典の価値とはつねに現代的価値であると言わねばならない（哲学研究者は、「古典」という名に甘えずに、そのような覚悟をすべきだと宣言しておこう）
とはいえ、実際の議論で古典が引き合いに出される

とき多く見られるのは、（私自身反省の意味を込めて述べるが）すでに自ら抱いている見解に対して、その歴史的な由緒正しさを示して何らかの裏づけや保証を与えたり、逆に自らが否定する見解がいかに連綿と受け継がれてきたかを示す（そのことによってそれを否定する新たな見解の意義を高める）というパターンである。そしてまた、この特定領域研究に集った専門家たちの研究現場を離れて、古典の現代的価値を一般的に考えるならば、これと同型の古典の利用は広範に見られるだろう。つまり、古典とは名言や教訓の居場所であり、それは現代人に対して、古代の偉人も自分と同じことを考えていたのだ、という保証や安心感を与えるべく機能している。この手の特集の多い雑誌にちなんで、これは古典の「プレジデント型」の価値とも呼べるかもしれない。（現代における古典の価値を考えようとするとき、古典に期待されるこの種の社会的機能も無視してはならないだろう。）

しかしはたして、哲学において古典の価値とは、あくまで現代のあれこれの見解に対して何らかの意味でそれを補強するものでしかないのだろうか。具体的な古典作品と取り組むとき、それとは別の図柄が見えてくる。私がこの特定領域の課題研究を通じてその校訂や注釈、そしてその受容史の研究にたずさわっているアリストテレスの『デ・アニマ（魂について）』という著作についてもそうである。

この作品は、西洋古代後期からイスラムを経て中世にかけて非常に重要視され、いわゆる「能動理性」の解釈をはじめとして、さまざまな問題を投げかけてきた。近年ではヘーゲルの哲学構想やハイデガーの哲学のかなり根幹部分に対する影響が指摘されている。（ただし、きわめて多くの注釈や研究が存在するにもかかわらず、テキストの校訂や個々のパッセージについての注釈などをやり直す必要があり、私自身はそのような作業にたずさわっている。）しかし、この著作の伝承において最も重要な出来事とは、この著作の基本的論点に対する否定という事態であった。すなわち、この著作で表明され、スコラ哲学を経てある形で定着したアリストテレスの「魂」についての見解は、デカルトがコギトという新たな哲学の原点を発見する上で、最も主要な批判対象となったのである。

だが、紋切り型を覚悟で言えば、デカルトのコギトの発見が近世哲学の誕生を促したのに対して、現代哲学は、デカルトの二元論的、意識中心主義的見解に批判的である。その結果、デカルトへの評価の下落に反比例して、逆にアリストテレスの評価は高くなった。魂と身体の一元論や、心的状態に対する非意識内在主

義的アプローチというアリストテレスの立場は、現代哲学に親近的なのである。(だからアリストテレスは、20世紀後半の哲学及び認知科学をリードしたひとつの立場である機能主義の祖と評価される。)だが、もしこれが『デ・アニマ』という古典の現代的な意義ならば、それは先ほど見た現代の見解の補足的役割、「プレジデント型」の価値というにとどまるであろう。

しかし事はそれで終わるわけではない。基本的に一元論を採る現代哲学は、デカルトが物的な存在から分離した心を何らかの意味で自然的な過程(生理学的、物理的状態)に還元したり依存させたりして理解しようとしている。では、そのような自然的状態に結びつけられるべき心とはそもそも何か。心的状態の最も重要な指標のひとつとされるのが「志向性」の概念である。つまり心の状態は必ず「何かについて」であるという性格をもつというのである(「考える」とは「何かを考える」のであり、「期待する」とは「何かを期待する」という特徴をもつ)。自然的状態には見られないこの特徴をいかに生理的・物理的な状態へと自然化するのかということが、現代の「心の哲学」の重要な課題となっている。

しかし、志向性という概念にもまた歴史がある。この概念を中世哲学から「復活」させたブレンターノは、その起源をアリストテレスに見ていた。実際この概念の形成にあずかったのは、直前に刊行されたブレンターノ自身の『デ・アニマ』の研究であった。しかし(この点は十分に認知されていないが)、彼のアリストテレスに対する眼差しは、まず第一にデカルト(!)と、さらには新プラトン主義的な解釈の伝統というフィルターを介在させていた。デカルト及び新プラトン主義に見られる基本的なモチーフは、ともに、心のはたらしきを身体および外界という因果的世界から独立なものとして捉えようとするのであった。おそらくブレンターノの志向性概念のもつ問題性は、アリストテレス的なものとデカルト的なものという二つの要素の本質的には無理な結合にあるだろう。そして現代の心の哲学の中心問題となっている志向性をめぐる議論は、デカルト哲学を否定しながらも、デカルト主義の残滓を引きずったこの概念を、それと明確に気づかずに位置づけようとしていることになる。

以上の例に見られるように、古典は、さまざまな伝承と解釈、そして時にはその否定という形を通じて、現代のわれわれがものを考えるための枠組みや基礎的な諸概念を提供している。その意味で、古典は現代そのものを構成しているのである。「古典」と「現代」とは、個々独立に存在し相対峙するのではない。古典と

その伝承の解明は、現代のさまざまな見解の補助・補足ではなく、現代そのものの解明という局面をもつ。すなわち現代の諸問題について、問題に対する特定の見解の支持や拒否という機能にとどまらず、それがそもそもなぜ問題となってきたのか、という問題を構成する諸前提を明らかにするのである。

しかし同時に、古典は現代そのものではないことも、やはり明白な事実である。そして現代からの隔たりという古典のもう一つの局面もまた、現代を理解するために意味を持つ。われわれは古典に目を向けることによって、何が継承され、何が否定され、何が見失われたのかを辿ることができる。ただしそれには古典を現代の間尺に合わせて都合よく解釈しないことが何より重要であるが、文献学的な厳密さを期すことが、そのために不可欠の手続きである。

以上の意味において、古典は、現代だけに目を奪われては見えないものを、明るみへともたらすのである。私はこのような機能が、「大古典」に限ったことであるとは思わない。古典は、程度の差こそあれ、そしてその肯定という形であれ否定という形であれ、現代のわれわれのものの考え方や(文学作品ならば)感性の形成に貢献しているであろう。われわれのものの見方や感じ方を構成し、同時に現代とは別の思考の可能性、別の感覚の覚醒の可能性を胚胎するものとしての古典。しかしそのような古典の潜在的可能性は、あくまでわれわれとの対話によってしか顕現しないのである。古典の可能態を現実態へともたらすこと「古典学の再構築」とはそのような責務を負っているとも言えるだろう。

(A04「古典の世界像」班)



価値ある古典研究のために

川原 秀城

東京大学大学院人文社会系研究科 教授

東京大学人文社会系研究科の川原と申します。専門は中国思想史と東アジア科学史です。本日のテーマは「現代における古典の価値」ですが、わたしのばあい、古典研究者が古典研究を価値あるようにするためにはどうすべきか、と問題を再設定してお話いたします。

古典学のどの分野もそうでしょうが、古典研究には伝承や訓練というようなことが常についてまわります。わたしは中国学を専門としておりますが、中国学は日本において最も古く、奈良平安時代から古典として成立した学問であり、だいたい一千年以上の教育と訓練をつみかさねてまいりました。われわれが中国学を論じるときには、その一千年の研究成果を前提にしなければなりません。むろん日本の一千年だけを前提にすればいいというだけではありません。それにくわえて中国本土の三、四千年の研究成果や技術的な蓄積、また中国以外の中国学の成果をも前提にしなければなりません。先行の訓練や技術を学ぶこと自体、容易ではありませんが、古典学がその価値をもつためには、すくなくともしっかりした訓練をうけなければならない。これは古典研究者に課せられた最低限の条件だろうと思います。

わたしがそのことを前提にしてのべたいことは、現在社会において古典が受け入れられるためには、われわれ研究者のほうからも古典学の形をある程度変えていかねばならないのではなからうかということです。中谷先生の言葉でいえば、新しい衣に着替えなければならないとなりましようか。

どうしてそのようなことを考えはじめたのか、具体的にすこしお話ししたいと思います。中国文明を明かにするためには、思想のことも文化のことも文学のことも科学のことも、全部知る必要がある、というような一般論は今日のはべません。今日はわたしが中国、東アジアの数学に興味をもち、読み進めてゆく中で気が

ついたことや考えたことに限定してお話いたします。

考古学においては発掘者の意識にないものは見えない、存在しないというようなことはよく言われますが、古典学においても同様な気がいたします。わたしは最初個人的な趣味から中国の数学の勉強をはじめました。古い時代から現存する数学の順に読み進み、清代数学書までだいたい読了しました。当時においても、知識としては中国数学は宋元ごろ、大きく変化したというようなことは知っていましたが、その正確な意味を理解しておりませんでした。ある偶然から和算書の研究を強要され、和算と中算の関係について分析しました。和算書を読み、和算には中国の影響が非常に大きいことを実感しました。和算書を研究したため、中国数学に関する理解が大きく進みました。和算に大きな影響を及ぼした数学書といえば、朱世傑の『算学啓蒙』ですが、中国数学は宋元ごろに大きく変化したことについて正確に理解したのは、実は和算を知り『算学啓蒙』を精読してから後のことです。ところがです。その和算に影響をあたえた『算学啓蒙』は、実は朝鮮本でした（そのことを指摘する先行研究もありました）が、わたしは当時、朝鮮本であることをほとんど意識しませんでした。ところがある偶然から朝鮮数学の研究に手を染め、朝鮮数学書を読み進むうち、しだいに朝鮮本であることの意味がわかってきました。朝鮮本『算学啓蒙』は秀吉の朝鮮侵略時の略奪本であることに気がつき、事の重大性に思いいったわけです。

単純に言えば、明治以前の科学において日本人が世界に誇れるもの、これは和算だけです。優れた科学的技術的な業績は和算以外にも若干あることはありますが、それは中国の科学や技術、朝鮮の科学や技術をすこし変化させた程度のものにすぎません。大きな飛躍があるとするれば、和算だけだろうと思います。恥ずかしいことですが、和算の成立については朝鮮数学を知ってはじめてその意味がわかり、和算の価値についても源流に遡って考えて、優れたところがわかりました。明代、中国数学のレベルは急激に下がり、宋元の高レベルの数学は急速に忘れられていきます。だが宋元数学は朝鮮に伝わり、制度上の必要から、本国で亡んだ宋元数学書が朝鮮で再版されました。宋元数学書の再版本を、朝鮮に侵略した秀吉軍が日本に持ち帰った。かくして日本に朱世傑『算学啓蒙』が伝わってきたわけです。

わたしは朝鮮数学を知ってはじめて中国数学や和算

の（文化史的な）意味を理解し、強烈なショックを受けたわけですが、ショックを受けてはじめて、中国学の知識だけでは不明なことが多すぎる、せめて朝鮮も含めた形で東アジアのことをやらなければ、中国古典の意味や価値について正確に理解することはできない、すくなくとも 東アジア学の分科とならなければならぬ領域もあるのではなかろうか、などと思ったり、以前の研究態度に心中恥ずかしさを覚えました。

よく「宇宙船地球号」などといわれますが、真の古典学とは、地球上あらゆる民族のすべての古典の知識を得てはじめて言えることかもしれません。思いがけぬ形で文化伝承は生じるからです。とはいっても、われわれ人間の時間や能力は限られています。わ

たし個人としてはサンスクリットの文献も、ギリシア語も、ラテン語も、スペイン語も、中国語もすべて読みたい。ハンガルの書物も読みたい。だがやはり能力の関係上、そうは行きません。われわれはいったいどうすればいいのか。よくわからないながらも、とにかく従来の枠組みに止まっていたは何もできないことは確かです。（実践については心許ないですが）先行研究の成果はどんなに優れており従来の訓練はどんなに大変であろうとも、既定の枠組みを広げるような努力をしていかなければならない、と現在のところ考えております。

ご静聴ありがとうございました。

（A04「古典の世界像」班）

